

# 日中同時通訳における誤訳長文に関する実証研究序説

龐 焱

**Empirical Research on the Mistranslation of Long Sentences  
in Japanese-Chinese Simultaneous Interpretation**

**PANG Yan**

---

広東外語外貿大学 東方言語文化学院 日本語学部 准教授

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 客員研究員

連絡先：龐 焱 〒510420 中国広東省広州市 白雲大道北2号 広東外語外貿大学東方言語文化学院  
houenzi@hotmail.com

## 要 旨

本稿では、日中文法構造の視点から、実例のデータの統計と分析を通じて、日中同時通訳における誤訳長文に関する研究の必要性と意義を論じ、今後、この研究を展開して行くための研究方法と研究構想を提示した。

日本語は長文がよく使用され、述語など話者の主な態度を表現する重要な成分が文末に来る。この特徴が同時通訳に大いに影響していることが実例の分析を通じて分かった。今後、同時通訳の訳出の質を改善していくために、日本語の誤訳長文の特徴、そして、その特徴に応じた方策を見出しいくのは非常に有意義なことである。本稿では今後の研究を展開していく必要性和方向性を明確にした。

今後の研究方法は、日中パラレル・コーパスを踏まえて、定量的な分析方法を定性的な分析方法と結びつけて、観察法と経験総括法を利用し、研究の主題と目的について、実証的にロジカルな帰納、演繹推定をしていくことを目指している。

**キーワード：**日中同時通訳、長文、誤訳、パラレルコーパス、通訳方策

## Summary

This paper will discuss the necessity and significance of research on the mistranslation of long sentences in Japanese-Chinese simultaneous interpretation through the analysis and statistics of examples and data from the perspective of the grammatical structure of Chinese and Japanese, and the use of novel research methods and research ideas.

Through the analysis of examples, we can find that since long sentences are often used in Japanese and important components such as predicate that declare the speakers attitude are often located in the end of the sentence, these characteristics bring various problems to the simultaneous interpreter. In order to improve the quality of interpreting, it is very meaningful to study the characteristics of the mistranslation of long sentences in Japanese-Chinese simultaneous interpretation and identify the best corresponding strategies. So the necessity and direction to expand this research becomes very clear.

The study will use an empirical method, based on the Chinese-Japanese parallel corpus, combining the methods of quantitative analysis and qualitative analysis, using the observation method and experience summary method, focusing on the theme and purpose of the research, hoping to have a logical induction and deductive inference.

**Keywords:** Japanese-Chinese simultaneous interpretation, long sentences, mistranslation, parallel corpus, interpretation strategies

## はじめに

中国における日本語から中国語への同時通訳は、現在中国語を母語とする通訳者がほとんどを行っている。AIICの言語規定により、A言語への同時通訳が通例として認められているが、しかし、日本語をB言語とする中国語母語の通訳者にとって、日本語を中国語に同時通訳することが非常に難しいとの認識は通訳者界では共通問題となっていることは確かであり、当面は中国語母語の通訳者や研究者に課された課題でありつづけるのである。

筆者が長年抱いてきた疑問は、日中同時通訳は中国語母語の通訳者にとってどこが最も難しいのか？日中同時通訳の作業に大きな障害となるものは一体何だろうか？それはどんな特徴があり、どのように対応したらよいのか、というものであった。

これまで、文法構造の相違点が同時通訳に与える影響を巡り、日英の研究学が論じてきた研究成果が多くあったが、例えば、福井・浅野（1961）では、「日本語と英語とでは、文章の文法的な構成が非常に異なっています。ですから、本来ならば、いずれかの国語で表現された文を訳すには、その文全体を聞き終わるまで待たなくてはなりません。特に日本語では肯定、否定を示す言葉は文章の終わりに来ますから、中途まで聞いただけでは、果して『…である』のか『…でない』のか分からないことが多いのです。」という記述の後に、直ちに短い実例の説明に移っている。船山（1985）の論文は日英同時通訳だけを扱ったものではないが、語順の違いがもたらす困難について、「日本語から英語に同時通訳する場合に、述語部分がなかなか出てこない点が大きな障害になることは誰の目にも明らかである。」と述べ、また西山（1988）は「日本語を英語に同時通訳する場合、原理は英語から日本語の通訳と同じであるが、日本語の文章は、語順が英語と大きく異なるほか、動詞が文章の最後にくるから、英語の文章をそれに合わせて英文のやや後半に動詞がくるように工夫する必要がある。つまり動詞は文全体の意味を決定する重要な品詞であるから、動詞に繋がる中心的な情報がはっきりするまでは、文に含まれる他の情報を表現し、それから中心的な動詞がわかったら英語の文章を完成するのである。」と言う。

以上の説は全て日英同時通訳を巡っているものであ。中国語と英語はSVO構造の言語であるので、SOV構造である日本語へ同時通訳する時、同じように語順の違いによる困難に直面するはずである。筆者の長年の経験と他の同時通訳者の実践的な経験から、SOV言語からSVO言語への同時通訳である日中同時通訳は日本語において、長文の重要な成分が文末に来る場合は、理解に混乱が生じ、最後まで聞き終わらないと、誤訳に至ってしまうとの共通認識があった。

もし日中文法構造の相違点が同時通訳の誤訳に対する大きな要素である事が確かめられれば、その誤訳された日本語文の特徴を把握し、文型に応じた改善方策を見出すことができる。これは日中同時通訳の質の向上に非常に有意義のものではないかと期待される。故に、今後、この一連の問題を課題として、研究を展開していく必要性も非常に大きいと考えている。

以上の理由を踏まえて、本稿は、日本語の長文が日中同時通訳の質に影響する主要な現象であるかどうかについて調査、研究を行う。もし、日本語の誤訳長文がその重要な影響要因の一つであることが確認できれば、今後、どのような構想と方法に従って、研究を展開していくのか、具体的な案を提示していきたい。

## 1. 日中同時通訳における日本語の長文による誤訳の実例分析

まず日中同時通訳における日本語の長文が同時通訳の質に影響する主要な原因であるのか確認するため、筆者が一つの会議データに基づき、分析をし、その結果を見てみたい。

実証研究とした会議データは2008国際環境保護フォーラムである。具体的な分析方法は次の通りである。

まず、筆者が会議現場で録音したスピーチを同時通訳会議室で4名（P. A. Y. D）の通訳資格を取った通訳者に同時通訳してもらい、録音する。それから、話者の日本語のソースランゲージ（SLと略称する）と再度録音し、訳出されたターゲットランゲージ（TLと略称する）をWordでトランスクリプト（Transcribe）し、文毎に区切り、Excelにコピーをして、小規模のデータベースを作る。それから、Excelの分析の機能により、研究目的に応じて、分析を行う。

紙面の制限があるため、出来上がったデータベースの中から一つの文だけを抽出して、このデータベースがどのようなものかを示す。（表1）

表1 データベースのイメージ図

通訳者	ソースランゲージ (SL)	長さ	ターゲットランゲージ (TL)
P	学ぶ側がモチベートされていると、次に学ぶ必要と、それから学びたいという意欲とをもっているときに一番効果が出るものだと私は思います。	69	能够予以动力所需要呢，学习以及想学习的意愿，有这些意愿的时候呢是最有效果的。
A	学ぶ側がモチベートされていると、次に学ぶ必要と、それから学びたいという意欲とをもっているときに一番効果が出るものだと私は思います。	69	就是给他 (p) (2) 意愿，想要学的，有想要学的意愿的时候，效果是最好的。
Y	学ぶ側がモチベートされていると、次に学ぶ必要と、それから学びたいという意欲とをもっているときに一番効果が出るものだと私は思います。	69	呃，需要学习，学习的必要，以及对学习的呃，意愿的时候呢，最有效果的。
D	学ぶ側がモチベートされていると、次に学ぶ必要と、それから学びたいという意欲とをもっているときに一番効果が出るものだと私は思います。	69	恩，(p) (2) 学习的重要性以及学习的一个兴趣，这两者相辅相成的时候是最有重，是最有效力的，

それから、データベースにおける話者のSL文を文字数によって三段階に分けて、評価する<sup>1)</sup>。つまり、①文字数は50個以下のもの、②文字数は50～70個のもの、③文字数は70個以上のものと、三段階に分けて、四名の通訳者の訳出語（TL）の質を分析し、通訳者の各段階における誤訳の数量を統計する。

この会議で得た SL 文の詳しい統計情報は以下の通りである。(表 2)

表 2 2008国際環境保護フォーラムの統計データ

会議名称	SL トータル字数	文の数量	③	②	①	③の割合	②の割合	①の割合
08年環境フォーラム	12461	175	73	44	58	42%	25%	33%

誤訳の判断は、通訳の訳出の品質の評価と基準に依拠している。「現在、まだ納得できる結果を提供できる通訳の評価基準と方法がない」と蔡小虹は指摘している(蔡、2002: 280)。仲偉合は、同時通訳の判断基準について、「一般的に、発言原文の情報を75%以上伝えるなら、合格である同時通訳と言えよう」と言っている(仲偉合、2008: 26)。「我々の業界では、同時通訳に対する評価は、重大な誤りがなければ、例えば、大部分の内容を漏らしたり、深刻な誤りを起こしたりすることさえなければ、基本的に成功した同時通訳といえるだろう。一般的に、正確率は80%~90%に達成すれば、もう素晴らしいものである」と北京外国語大学薛建国教授がある同時通訳の実践作業を終えた後に、メディア陣の人に語っている<sup>2)</sup>。

本稿の研究目的という見地から、筆者は、文を分析単位とし、TLにある主要情報の漏れと誤りの量が25%以上であるものを誤訳文と見なすことにした。TLに現れた重複、ためらいおよび停滞による中断は誤訳と見なさない。

実験通訳に参加してもらった通訳者は全部で4名である。筆者は、以上の基準に基づき、4名の通訳者のTLを分析し、品質を評価する。それから、判断した結果を縦方向と横方向との二つの方向で統計する。縦方向の統計というのは、各通訳者のこの会議に対する同時通訳の誤訳のトータル数であり、その後の各通訳者の通訳品質を分析する時に使用する。横方向での統計は、各SL文に対して、4名の通訳者の誤訳結果を統計することを指す。もし、同じSL文を、2名又は2名以上の通訳者が誤った場合は、このSL文を誤訳文と見て、最後に、全ての誤訳文のトータル数を統計する。

以上の方法に基づき、まず、この会議の全体的な誤訳数量を統計してみた(表3と図1)。

以上の統計結果によると、2008年国際環境保護フォーラムのSL原文は、50文字数以下の文は合計58で、誤訳された文は3、誤訳文が50文字数の文に占める割合は5.17%であり、50~70文字数の文は合計44で、誤訳文は3、誤訳文が50~70文字数の文に占める割合は6.82%であり、70文字数以上の文は合計73、誤訳文は22で、70文字数以上の文に占める割合は30%以上にも達していることが分かった。

表 3 08年環境保護フォーラムにおける誤訳の段階別分布状況

各段階の文の数量	誤訳文数量	各段階の文の合計数量	誤訳文の各段階に占める割合
50文字数以下	3	58	5.17%
50~70文字数	3	44	6.82%
70文字数以上	22	73	30.14%
合計	28	175	16.00%

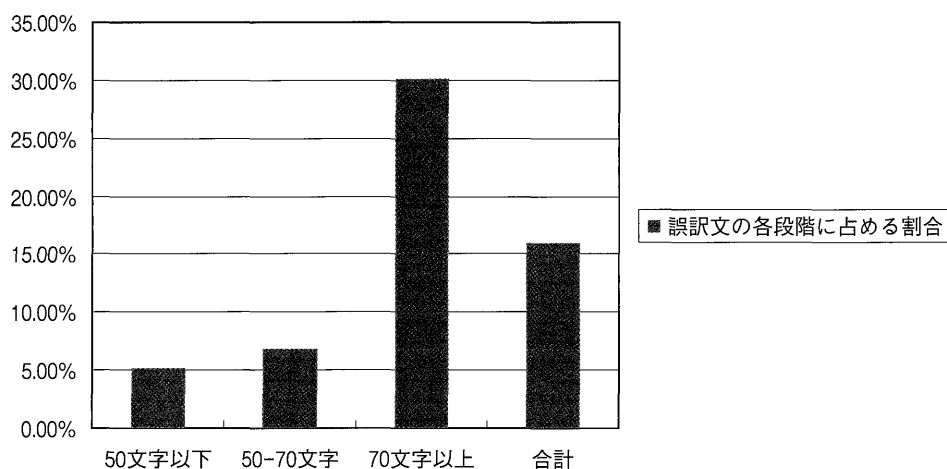


図1 誤訳文の各段階に占める割合

次は、全ての誤訳文の中における各長さの分布状況を見てみよう（表4）。

以下の表4をご参考下さい。

表4 全ての誤訳文の中における各長さの誤訳文の分布状況

文字数	誤訳文の数量	誤訳文の合計数量	占める割合
50文字数以下	3	28	10.71%
50～70文字数	3	28	10.71%
70文字数以上	22	28	78.57%

以上の表4の統計結果によると、70文字数以上の誤訳文の割合は最も大きく、78.57%にも達し、50文字数以下と50～70文字数の誤訳文の割合はそれぞれ10.71%であることが分かった。

最後に、この会議の同時通訳が基準に達するものであるかどうかも見てみよう（表5）。

表5 各通訳者の通訳の質の統計表

通訳者	誤訳文の数量	SL 文の合計数量	正確率
P	6	175	96.57%
A	25	175	85.71%
D	32	175	81.71%
Y	36	175	79.43%

以上の統計表から分かるように、通訳者Pの正確率は96.57%に達し、非常にうまく通訳していることが分かった。正確率は一番低い通訳者Pでも79.43%に達し、評価される通訳と言える。従って、4名の通訳者の本会議における訳出の質は全て研究の条件を満たしている。

以上のデータベースに基づいた統計結果を踏まえ、この会議の場合の結論は次のようにまと

めることができる。

- (1) 日中同時通訳の中では、日本語の話者がよく長文を使うことから、長文の誤訳が同時通訳の質に大きく影響する要因となっている。
- (2) 長文の誤訳の原因を解明し、その誤訳に対応する方策を見出すことは、日中同時通訳の訳出の質を改善することに大きく貢献でき、大きな意義を持っている。
- (3) 本研究の目的に応じ、70文字数以上の文だけを本研究の研究対象とし、70文字数以下の文は対象に含めないが、このことが本研究に与える影響は非常に小さい。

一つの会議のデータは非常に限られているため、分析結果も、局限性があると思われる。しかし、今後、展開していこうとしている研究の事前調査として、この結果はある程度参考にできるもので、今後の研究の方向性を示してくれているのではないと思われる。

## 2. 本研究に使用するコーパスの構築

通訳研究の総体的な発展ルートが多くの学問分野に跨る複合的な研究方向に向かっているため、通訳研究の方法も、以前の主観的な推測と経験の総括という伝統的な方法から、データに基づいた客観的な描写と実証的な分析に変わりつつある。より客観的、なおかつ信用できる研究成果を出すために、今後続けていく研究の研究方法を、SL - TL のパラレル・コーパスに基づいた、定量的な研究方法にしようと考えている。

### 2.1 本研究用のパラレル・コーパスの構築

#### 2.1.1 データの収集と選択

本コーパスに使用したデータの特徴は、政治、経済、文化、環境保護など、幅広い分野にかかわることである。また、筆者の担当した同時通訳が主に広州を中心とした広東省と香港で開催された国際会議である、地域性が強いという特徴もある。

コーパスに選んだデータは主に以下の三つの内容である。

- (1) 広東省政府によって開催された最高レベルの経済諮問会議——広東経済発展国際諮問会、2005年、2007年と2009年連続三回の録音。この会議の内容は、主に広東省の経済発展を巡る討論と関連提案であり、会議の出席者はすべて世界トップ500社の CEO で、話題は技術イノベーション、人材育成、知的所有権、環境保護と国際協力などを巡るものである。
- (2) 広東省——兵庫県経済促進会の録音。この会議は主に広東省と兵庫県の経済をよりよく発展させる目的で、開催された経済発展の経済年次会であり、2003年から現在まで、毎年開催している。
- (3) 広州市、シンセン市を初めとする珠江デルタ地域及び香港特別行政区で開催されたその他の国際会議とフォーラムの録音。例えば、南海経済座談会、中日経済ホットポイントフォーラム、省エネフォーラム、国際観光サミットなどの内容に関するものである。

以上の内容で、合計日本語10万字程度の文字数である。

### 2.1.2 TL 音声のレコーディング

会議現場の録音条件が限られているため、筆者は会議現場で話者の発言しか録音できなかった。筆者が SL の録音しか持っていないことは、パラレルコーパスの構築だけでなく、リアルなデータの獲得と実際の作業中の同時通訳者の具体的な状況を客観的に分析することに大きな困難を与えている。

同時通訳のコーパスを構築する時、直面している実際困難を考慮した上、本研究用のコーパスデータの作成は実験法を使用することにした。つまり、本コーパスに使用する SL データは会議現場の録音音声で、TL のデータは実験室で通訳者の通訳した音声を録音したものである。

実験用の同時通訳者は台湾輔仁大学翻訳学研究所の通訳研究科の4名の二年生である。この4名の学生は、すべて2010年6月に行った輔仁大学翻訳学研究所の通訳資格試験に合格、台湾地域の社会通訳資格を獲得、台湾地域で通訳の仕事を従事することが認められている新進通訳者である。2010年6月までに、この4名の通訳者は全員10回以上の同時通訳の経験も持ち、台湾地域で活躍している通訳者でもある。

録音は輔仁大学翻訳学研究所における同時通訳会議室で行った。この会議室には、同時通訳用のガラス張りのブースが六つ設けられ、必要に応じた録音設備も揃っている。

録音の一週間前には、通訳用の資料を通訳者に配布した。これらの資料は会議のスケジュール、背景資料の紹介、出席者の名簿リスト及び発言のレジュメ、PPT などを含んでいる。当日は連続作業による通訳者の疲れを避けるため、録音中、20分間毎に、通訳者に休憩させた。録音時には、会議現場で発言話者が使用した PPT など使用し、学生を5、6人ぐらい会議室にある円卓の机の周りに座らせて、なるべく、会議現場の雰囲気再現しようとした。以上のことに基づき、録音された TL の質は比較的客観的、かつリアルなものだと言えよう。

### 2.1.3 SL と TL のテキストの整理

SL つまり日本語の録音は筆者本人が聞きながら、トランスクリプト (transcript) をし、word で保存した。日本語話者の発言中の停滞や重複などがあった所は全てそのまま書き写して、標識をつけた。TL も同じ方法でトランスクリプト (transcript) をし、word でテキストを全部保存した。TL に出てきた停滞と中断、誤訳、重複などの表現をすべてそのまま書き写し、標識をつけた。

word で整理したテキストに対して、意味の完成度と、文と文の間の接続関係に基づき、テキストを独立した文に分けた。意味の完成度というのは、つまり、日本語の話者の意味を表現する時の一番小さな単位の独立性を指す。文字表現の角度から定義をすると、二つの句点又は句点の機能を持っている符号の間の構成単位を文と定義する。

例えば：

- |  |                    |
|--|--------------------|
| (1) 以上です。  | (2007年広東経済発展国際諮問会) |
| (2) ありがとうございます                                   | (2009年広東経済発展国際諮問会) |
| (3) 丸紅の辻です。                                      | (2005年広東経済発展国際諮問会) |
| (4) 副省長さんのあのグリーン広東省をつくるという大変力強いお話、あの大変感銘深く伺いました。 | (2005年広東経済発展国際諮問会) |



以上の文は、全て独立した文であり、その他の要素による影響を受けず、最小限に完全な意味を表現できる。以上のような文を独立した文と見て、SL テキストを区切って行った。

文の接続については、日本語話者が発話時の停滞や重複などのことを考慮した上で、一つの独立した意味の表現がすでに終わったにもかかわらず、文末に接続助詞または接続助動詞が来る場合は、その文節を一つの大きな文の中の従節と見なす。例えば、

- (5) それで、先ほど、話がありますように、イノベーションも、もちろんそうですが、その技術移転をしてくる時に、まだ多くの企業が知的財産問題に、懸念も持っております。

(2005年広東経済発展国際諮問会)

例文(5)中の“それで、先ほど、話がありますように、イノベーションも、もちろんそうですが”という文は、一つの最小単位の独立した文を見ても良いにもかかわらず、その文の文末に“が”という接続詞が話者によりつけられているため、発言はまだ終わっていない、まだ、話が続いていくという意味となる。最後の“その技術移転をしてくる時に、まだ多くの企業が知的財産問題に、懸念も持っております”と喋り終わって、その後は、すでに、ほかの接続詞などの内容がついてこなかったから、筆者はここでいったん区切って、例5の文を一つの独立した文と見なすことにした。

以上の区切る原則に従い、SL を文の単位で区切っていった。それから、研究の目的と内容に応じて、区切った後のテキストを標識をつけた。例えば、本研究の目的に従い、筆者は SL の録音を聞きながら、全ての文のスタート時間に標識をつけた。また、予測された研究テーマに応じて、“赤+太文字”の形で、“という”表現に標識をつけた。

例えば：

- (6) 日本の科学予算の、大体十分の一は、これに使われているというふうにも聞いておりますので、やはり、R&D 研究開発、大変重要ではありますが、やはり、あのう、先端技術のためには、競争という要因も考慮しなければならないいんではありませんか、というふうと考えております。 03:36 03:57

TL の整理法も基本的に SL と同じである。まず、word で、4 名の通訳者の TL をトランスクリプト (transcrip) してから、すでに区切り済みの日本語の文に従い、中国語の訳文を一つ一つの文に区切っていく。この段階では、筆者は通訳者の 2 秒および 2 秒以上の停滞に標識をつけた上、具体的な停滞時間を明記した。また、研究の必要に応じて、文と文の間の中断時間を明記し、標識をつけた。

以上の作業は、全て、word で行った。word で出来たデータはそのまま Excel にコピーしていった。

## 2.2. 本研究用コーパスの構成

以上の方法で、出来たデータは全て Excel 機能によって、検索、分析することが可能となっている。本研究用のコーパスにおける標識はすべて筆者が行った。日本語の SL は約10万字数で、中国語の TL は約36万字数である。また、SL である日本語の文は全部で1018、TL である中国語の文は4275である。具体的な詳細構成は以下の表 6 で示す。

表6 本研究用コーパスの構成詳細データ

	日本語 (SL)	中国語 (TL)
文字数	107405	360000
文の数量	1018	4275
通訳者数	4 名	

表7 本コーパスの標識

会議名称	通訳者	SL 日本語	TL 中国語
日本の少子化	Y	ええ、今日と来週の二回、ええ、およそ一時間ぐらいの時間をかけて、ええ、少子化と長寿化 <b>と言う</b> 、ええ、私たちの生活の中に起こっているとても大事な変化、これが、ええ、日本の社会の形をどのように変えていくのか、そして、もう一つは私たち一人一人の生活の在り方をどのように変えていくのか、今日はこの社会の形について、ええ、来週は生活の有り様についてお話をしていきたいと思います。	这个礼拜跟下个礼拜呢，差不多，恩，一个小时的时间来想要说这个，少子化以及，诶，长寿化，在我们日常生活上所发生的一个变化， <b>(p)</b> (3) 这个会，恩，让日本的生，社会会有怎么样的变化呢，还有，会怎么样让每一个的生活如何地变化，那我们今天针对这个社会的一个，恩，样子，那，下个礼拜呢，可能会是，要说的是，这个，对人的影响，

筆者がつけたコーパスにあるデータの標識によって、必要に応じ、自由検索が可能である。

表7は、通訳者YのTLの中に変な停滞があることに気づき、筆者がデータの整理段階で、それを聞きながら、標識をつけたものである。ここの(P) (3) について、(P) はポーズ (pause) を表し、(3) は、通訳者がここで3秒止っている意味を指す。

### 3. 本研究の研究手法

今日、通訳研究領域において、最もよく使われている現場観察法 (fieldwork)、調査法 (survey) と実験法 (experiment) にはそれなりの長所と短所がある。それぞれの研究方法の特徴を考慮した上で、多くの研究者は、多種の研究手法の総合利用と多種のデータの総合利用が、通訳のプロセスの研究と通訳現象の解釈に与える重要性を重ねて表明している (Gile, 1998; Riccaridi, 2002a)。通訳認知加工システムの複雑性に鑑みて、また、通訳活動の交際的かつ社会的な特徴を考慮した上で、定性的な研究方法を定量的な研究方法と結びつけて、観察法を主とし、さらに実験法を観察法とあわせて、語句を比較分析をすることによって、各研究方法の長所が研究の中に十分発揮されるだろう。これらの方法の利用を通じ、なるべく、各研究方法の短所を避けて、最大限にデータの有効利用、有効分析をし、客観的に日中同時通訳における日本語の長文と難訳文の文型特徴を掴んで、それぞれの文型特徴に応じる通訳方略を見出すことを計っている。

仲偉合 (2010) の通訳研究方法論体系に基づき、今後の研究の具体的な研究方法と研究構想を以下のように纏めた (図2)。

図2に示した通り、本研究の主な構想は、コーパスの中にある誤訳長文を細かく分析するこ

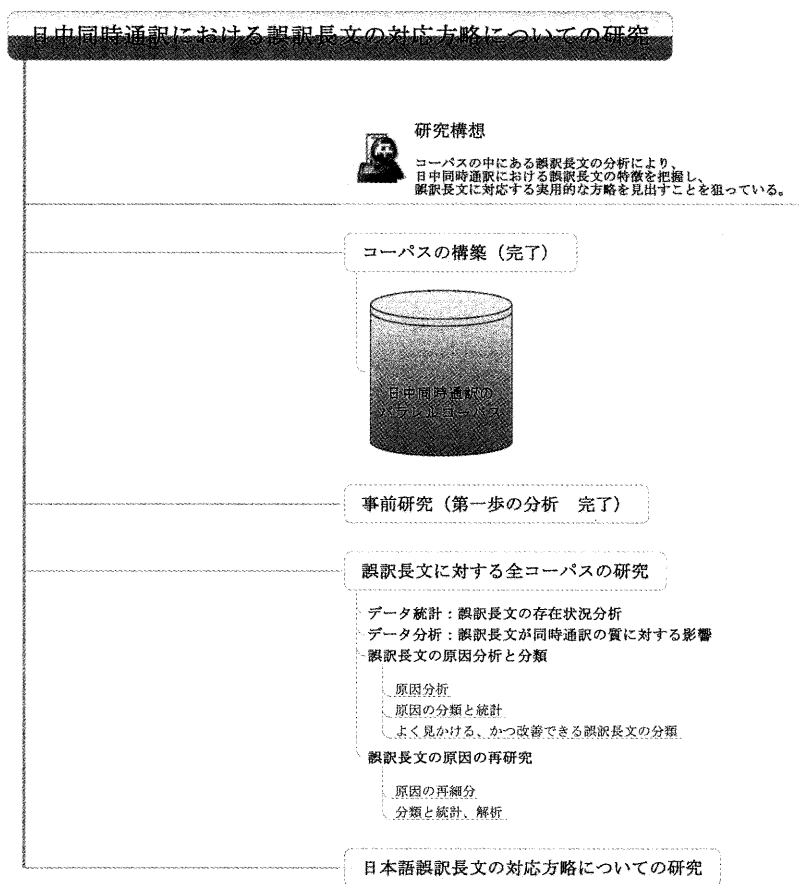


図2 本研究の方法と構想図

とを通じて、日中同時通訳の中における誤訳長文の特徴を把握し、その誤訳長文に応じる実用性がある簡単な対応方略を見出すことを目的とする。

本研究は主にコーパス研究方法で進めていこうと考えている。本研究に使用するデータは全て会議本場で録音したリアルな SL データであり、実験室の環境で、TL を獲得した後、テキストのトランスクリプトと整理をし、SL と TL を比較分析と研究を行う。

最後に、本研究は、日本語の誤訳長文の特徴に応じて、観察法と経験総括法を利用し、全コーパスの中にある通訳者の対応方略を見出していこうと考えている。

## 終わりに

本稿は、日中同時通訳における誤訳長文の実証研究方法と研究構想について、論じてきたものである。文字数の制限があるため、本稿は主に日中同時通訳における長文誤訳が同時通訳の質に障害をもたらす重要な要因と成っている事を、個別のケースを通じ、論じてきた。そして、今後、誤訳長文についての各研究が非常に重要、かつ有意義なことを予測し、今後の研究を展開していくためのベースになるコーパスの構築及び研究方法と研究構想を論じてきた。今後の研究は、日中同時通訳における誤訳長文の特徴の分析、誤訳長文の分類、誤訳長文に応ずる対

応方策などが主要内容となる。

## 謝辞

この研究は2011年度中国国家社会科学基金一般項目、課題番号11BYY014、2014年広東省人文社会科学基地広東外語外貿大学翻訳研究センター項目“日中同時通訳長難文の研究”、課題番号 CTS2014-10、2014年度広東外語外貿大学省級高等教育教学改革項目“広東経済社会発展新戦略語境における日本語人材育成モデルの革新”、課題番号 GDJG20141099によって、支えられていることを感謝して記す。

## 注

- 1) 長文の概念を定義するため、本研究の目的に応じ、日本語の文をこの三段階に分ける事にした。その分け方に関する理由は、今後、発表する予定である論文「日中同時通訳における誤訳長文の特徴」で論じる。
- 2) この話は <http://www.cnhubei.com/200408/ca561579.htm> から引用している。

## 参考文献

- 西山 千 (1988).『英語の通訳』東京：サイマル出版社  
福井治弘・浅野輔 (1961).『英語通訳の実際』東京：研究社  
船山仲他 (1985).「同時通訳の諸側面」(『視聴覚外国語教育研究』8号)  
水野 的 (2004).「日英同時通訳研究ノート」(『通訳理論研究論集』2号)  
蔡曉虹 (2003).「論通訳品質評価の情報単位」(『外国語』4号)  
仲偉合 (2008).『英語同時通訳教程』北京：高等教育出版社  
龐 焱 (2013).『日中同時通訳における誤訳長文及びその対応方略』武漢：武漢大学出版社

(原稿受理日 2014年7月3日)